

提 言

母乳栄養児には専用の身体発育曲線の使用を

山城 雄一郎 (順天堂大学大学院プロバイオティクス研究講座)

近年の研究によると、完全母乳栄養児 Exclusively breastfed infants (WHOの定義：母乳栄養のみを生後より4か月以上、5～6か月の間に離乳食を導入)は、人工栄養児に比し肥満、そして生活習慣病になるリスクが低い。その理由として人工乳に比し母乳は、たん白質濃度が低値、DHA (ドコサヘキサエン酸)濃度が高値そして母乳中には食欲や脂肪細胞の増殖と関係するレプチン、アディポネクチンが含まれていること等が推察されている。疫学データが示すように、乳幼児期の肥満は学童、思春期、そして成人の肥満に繋がる。従って、母乳栄養児でも、肥満の改善は必要である。



育児相談や乳幼児健診で重要な指標となる乳幼児身体発育曲線は、人工栄養児や混合栄養児の場合は、現行(厚生労働省発行)の発育曲線が有用である。

しかし、完全母乳栄養児に対しての使用は不適切と言わざるを得ない。完全母乳栄養児の体重、身長発育は人工栄養児に比し、緩やかであることがよく知られており、完全母乳栄養児の発育を現行の身体発育曲線にプロットすると“標準以下”即ち“母乳不足”と誤って判断され、“人工乳の添加”を勧められる事例も稀ではなく、母親の母乳哺育に対する不安や意欲低下を起こしかねない。母乳哺育(栄養)の種々の重要な利点を児に享受させるために、完全母乳栄養児専用の発育曲線が必須と考える。私たちはその目的のため、完全母乳栄養児647名で、男女別に生後24か月までの身体発育曲線を作成し発表した(Acta Paediatrica 2013; 102: 739-743)。その一部を図に示した。要点を述べると、男女とも現行の身体曲線に比し体重、身長は全体的に10%タイル近く低値で、頭囲はやや大きいことがわかった。対象者はBaby Friendly Hospitalで出生した完全母乳哺育児で、1国としての対象数は報告された中では最も多く、データの信頼性は高いと考える。わが国においても小児の肥満、生活習慣病、特にⅡ型糖尿病の増加が危惧される昨今、母乳哺育の促進が重要課題であるが、これを適切に指導、遂行するうえでも完全母乳栄養児専用の身体発育曲線は必須と考える。前述の発育曲線は、平成25年末までに、日本母乳哺育学会を通じて必要に応じて全国へ配布できる手配を準備中である。ご利用頂いて日常の臨床、育児相談に役立てて頂ければ望外の喜びである。

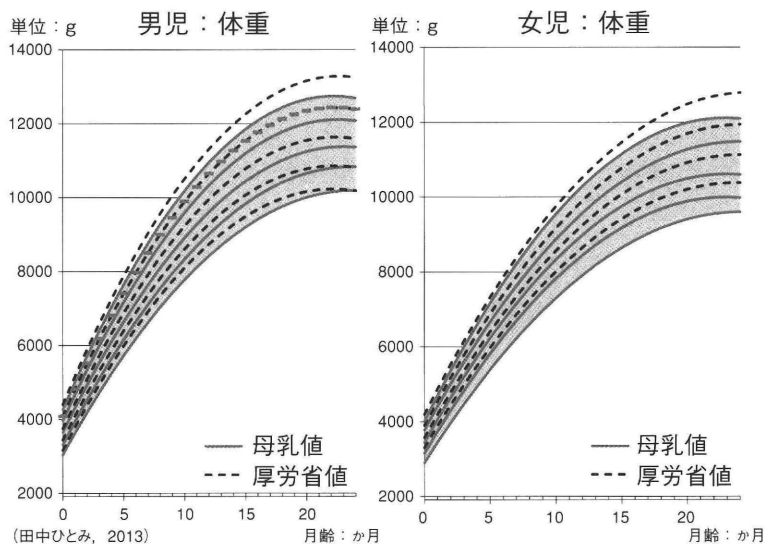


図 完全母乳栄養児(シャドー部分)と現行の体重発育曲線の比較